

家庭科で「今の生活」「未来の生活」を考え、 人生で大事にしたいことを生徒自身が発見する

生きる力を育むという観点からすると、家庭科の授業は、実はキャリア教育そのものと言えないでしょうか。進路指導やキャリア教育において、教科との連携を図るうえで参考にさせていただきたいその授業の中身をご紹介します。

取材・文／松井大助
 撮影／平野愛



家庭科
南野忠晴先生

1958年生まれ。大阪府立高校で英語教員として13年間勤務した後、家庭科の教員採用試験を再受験。大阪府立高校において初の男性家庭科教員の一人になる。NHK教育テレビ高校講座「家庭総合」講師。市民を対象とした「生き方講座」など、講演会の講師としても活躍。

**自分で自分の暮らしを整え、
 他者とも助け合えるように**

「自分のことを大人だと思えますか？
 子どもだと思えますか？」

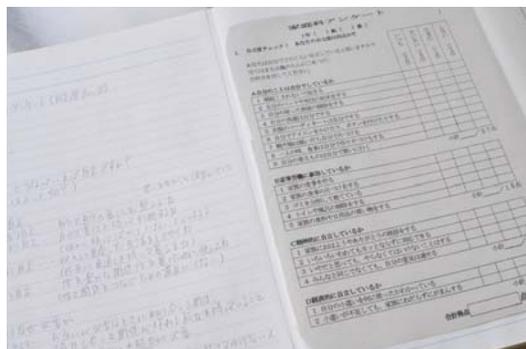
4月の家庭科の授業で、八尾北高校の南野先生は、高校1年生に対してそのように問いかける。続けて「どうしてそう思うのか理由も言ってください」とも。

生徒からは、飲酒年齢などの社会的な基準の話のほか、「まだ親に頼っているから子どもかな」といった意見も出る。いうなれば自立しているかどうか。そこで南野先生は、下の写真のような自立度チェック表を配り、生徒に確認してもらおう。得点が出るので、生徒同士の比べ合いも始まり、教室はにぎやかに。そのあとで黒板に書くのが、次の4つのことだ。

- 「生活的自立」
- 「精神的自立」
- 「経済的自立」
- 「性的自立」

生活的自立とは、自分で自分の暮らしを整える力のこと。精神的自立とは、自分で責任をもって判断する力のこと。経済的自立とは、収入に合わせて生活するなど見通しをもって暮らす力のこと。性的自立とは、性を道具のように使わず、豊かな関係性を築くために使う力のこと。

南野先生は、大人になるにはこの4つが大事だと考えている。病気や落ち込んだときに誰かの世話になることはあるし、いつでも何でも自分でやらなければいけない



自立度チェック表は、『人間と家族を学ぶ・家庭科ワークブック』（牧野カツコ編著・国土社）のシートを自分の授業用にアレンジしたものだ。

わけじゃない。でも、普段は自立的な生活をしている人であつてこそ、そのように困っている人がいたとき、自分のことを自分でやってきたその力でお世話できるといっても。要するに「自立」というのは、何をしたいのか「自分で考えて選べる」ようになることであり、自分一人で生きることではなく、人と助け合える関係を作れるようになることなのだ。

ただここで注意したいのは、自分にとって快適なことが、他人にとっても快適とは限らないこと。だからこそ南野先生は生徒たちに伝えていく。この授業や日常を通して、自分の暮らしを観察し、まわりの状況にも目をこらしていこう、と。

南野先生が家庭科の授業で目指しているのは、自分の暮らしを整える力、およびこの社会のなかで他者とともに生きていく力を、生徒自身が身につけることだ。

**今の生活や人との関係性を
生徒が多角的に見つめる**



南野先生は、生徒の発言については「間違ってもいい」という認識を皆と共有するように努めている。そのほうがお互いに学びが深まるからだ。

家庭科の先生にとつては周知のことだが、この教科で扱うジャンルは幅広く、まさに社会のなかで生きていくこと全般だ。南野先生が今受け持つ生徒たちは、1年次に食生活(食品選びや調理)、保育(子ども)の発達や親の役割、愛と性(男女の性や妊娠・出産)、高齢者(高齢者とのかわりや高齢社会)などの分野を学び、もう1年間で、住生活(住環境と健康・安全など)、衣生活(衣服の手入れや造形)、消費(賢い消費など)、経済(生活に必要なお金や人生設計)、家族(家族の形など)などの分野を学ぶ予定でいる。



授業の最後に、生徒は「私の考え」をノートに書いて提出。授業中の発言は苦手でも、ノートには考えをびっしり書いてくれる生徒もいる。

ある日の授業のテーマは発酵食品。南野先生が投げかける。「発酵ってどんなことになってんの?」「腐らすー!」

「腐ったもん食べて大丈夫なの?」「納豆とかあるし」「菌を入れるんでしょ」「いよいよ腐らすんちゃうん?」「そうそう、うまいこと言ってくれたないよ!」

生徒の発言は「拾えるものではないので、残さず食べてください」というので、彼らのほうが盛り上がりつつ次に意見を出し、時間が押すこともある。南野先生はそれを見越して、もともと1コマに必ず伝えることは、20〜30分に絞り込んでいく。残り時間は生徒との受け答えや、テーマに合った時事ネタを話す時間に充てる。

「授業中の受け答えというのは、生徒が興味をもって授業に参加してくれている状態であって、気持ちがダイナミックに動いている部分だと思っただけです。そこを大事にして学びを深めたいんです」

愛と性の分野では、左下のような表を使い、性的関係のことも考える。合意のない性的関係のことも考える。合意のない性的関係は犯罪だと確認してから、「恋人や夫婦は一度合意したらあとはいつでもOKか」を問う。すると生徒たちは、恋愛関係でも片方の支配や強制が起こりうる可能性に気づいていく。高校生カップルにも、本人たちは無自覚のままDV(ドメスティック・バイオレンス)が発生することがあるのを知る南野先生としては、ぜひ今考えてほしいテーマなのだ。

性的関係を考える

	合意	あり	なし
金銭のやりとり			
なし		[A]	[C]
あり		[B]	[D]

〈問題1〉
上の表は、性的関係を「合意」と「金銭のやりとり」の有無によって分類したものです。【A】～【D】にそれぞれの関係を表す適当な言葉を書きなさい。

〈問題2〉
この【C】と【D】をまとめて一言で表すことができます。それはなんでしょう?(ヒント:漢字で表すと二文字になります)

〈問題3〉
【A】の自由恋愛について考えます。自由恋愛だと、「浮気」もこれに含まれます。さて、お互いの同意もあるし、お金のやりとりもありません。あなたはそれでもOKですか?

- 〈答え1〉 [A] 自由恋愛、[B] 売買春、[C] レイプ・痴漢、[D] 強制売春
- 〈答え2〉 合意のない性的関係は「犯罪」に当たる
- 〈答え3〉 自由回答(人によってOKとOUTの感覚は違う。自由恋愛はすべてOKな人もいるし、浮気はすべてOUTな人、年齢や状況によって浮気のOKとOUTの線引きが変わる人もいます)

「性的関係」については、「自分が思う性的なことでもいい」と伝えられている。キスすることだと考えてもいいし、セックスだと考えてもいい。

家族の分野では、結婚相手の条件を考えるワークも行い、A君はブランド志向80%・関係志向20%、Bさんは関係志向100%などと数値化する。生徒たちに、自分が求める条件と、ほかの人の求める条件が違うことを認識してもらおうのねらいだ。こちらが相手にばかりあれこれ求めるのではなく、相手に無理に合わせるのでもなく、相手に無理に合わせるのでもなく、自分を知り、相手を知り、そこからお互いの関係を考えていくことの必要性を生徒たちは感じていく。

そうした授業の最後には、毎回、生徒たちがノートに自分が思ったことを書いて提出。題して「私の考え」というのだが、女子生徒がこんなことを教えてくれた。「南野先生は、書いた中身じゃなくて、書いた量で評価するんだよ」

そこに何か意図はあるのだろうか? 「中身の採点だと、生徒が僕の気に入ることを書かないといけなくなりそうで、嫌だったんです。何を書いてもいいし、僕の言ったことに反対してもいい。もしたくさん反論を書いたなら、それだけ家庭科の授業に頭を使ったわけですよ。そこに点数をあげます、と生徒に伝えていきます。彼らの人生は彼らが切り拓かなければいけないのだから、自分がどう生きていくかは、自分で考えてほしいんです」

**どのように生きるかは
生徒が自分で考えてほしい**

大阪・府立 八尾北高校

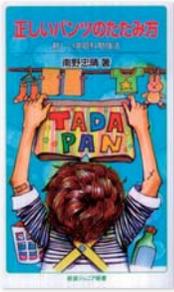


School Data

総合学科/1983年創立
生徒数(2013年度)698人
(男子215人・女子483人)
進路状況(2012年度実績)大学24%・短大17%
専門学校等27%・就職22%・その他10%
大阪府八尾市萱振町7-42
TEL 072-998-2100
URL <http://www.osaka-c.ed.jp/yaokita/>

Outline

大阪府中央東寄りに位置。自由選択科目(従来教科とその発展)と、5系列の総合選択科目(国際コミュニケーション、福祉ネットワーク、情報・テクノロジー、ライフクリエーション、人間科学)があり、生徒は興味・関心に合わせて約140の科目から自由に選択する。校内には古墳があり、その踊り場はダンス発表などに使われる。創立30周年を前にした昨年度には、作詞・作曲とも生徒が手がけた第2校歌が作られた。



南野先生の著書「正しいパンツのたたみ方」(岩波ジュニア新書)。家庭科の教科書作りにかかわったのを機にメディア関係者とも縁ができ、出版することになったという。パンツのたたみ方すら人によって違うという話から、家庭や社会のなかで他者とともに生きるうえで、家庭科の知識・技術がどう頼りになるかという話が展開されていく。



HINT & TIPS

1 具体的な体験や話題を出して身近なテーマだと実感させる

授業では、南野先生は、教科書の内容だけを伝えるのではなく、自分の体験や最近の生活トピックも関連付けて紹介する。例えば、消費の単元では、自分が10代のときに悪徳商法にひっかかった話も詳しくするといった具合に。習ったことは自分たちの生活に直結している、と生徒が感じられるようにするためだ。

2 生活のテーマを話し合うなかでお互いの違いを知ることを目指す

生徒が、生活力を身につけ、その力を他者と助け合うためにも使えるようになる。それが南野先生の目標なので、「どこまでが家族か」「結婚相手の条件」などのテーマをみんなで話し合うことも大事にする。一人ひとりの価値観は違う、と生徒が実感し、それを踏まえてかかわることの必要性を感じるようになるからだ。

3 先生の考えに従うことよりも自分で考えるプロセスを重視

南野先生は授業中に自分の考えを話すとき、「一意見」として表明することを心がけている。また、生徒に「私の考え」をノートに書いてもらうときは、先生がその内容の良し悪しを決めて判断しないことを伝えている。立場の強い先生側の考えにただ流されるのではなく、ものごとを自分で考えてもらうための工夫だ。

4 家庭でやれることを提示し役割を果たせる自分に気づかせる

「家族のための食事作り」を夏休みの宿題にするなど、南野先生は生徒に対して、調理や裁縫などを家族や誰かのためにしてあげよう、とも勧めている。高校生というのは、家庭または社会のなかで、自分が「してあげる」「役割を果たす」立場にもう十分にたてることを、生徒に実感してもらうためだ。

授業ができるまで

自身の生活を通して感じた家庭の知識・技術の必要性

南野先生は、自分が高校生のときは「先生にはなりたくない」と思っていたそっだ。

本音はどうであれ、生徒に規律を守らせなければいけない立場で、何か嘘くさく思えたからだ。でも大学生になると、民間企業のほうがもっと自分を曲げなければいけないように感じて、「先生のほうがましかな」と思い、教職の道に進む。

「実際に社会に出てみたら、民間企業にも倫理を大事にして頑張っている人がたく

さんいたわけですが、学生のころは若くて世間知らずだからそこが見えなかったんです。先生になりたくてなったのではなく、消去法での選択でした」

新任のときの担当教科は、家庭科ではなく、英語。そこから家庭科に興味をもつようになったのは、結婚して子どもが生まれたことがきっかけだった。

「子どもが生まれて、家庭の生活に今まで以上にかかわるようになって、知らないことだらけであることに気づかされたんです。育児の知識もない、栄養のこともわからない、赤ちゃんの肌着用の洗剤のことも知らない。僕が中学生・高校生のときは、家庭科はまだ男女共修ではなく、自分は学びませんでした。女性のほうが家庭のこ

とに詳しいのは、家庭科を勉強しているからかな、と思ったんです。もちろん、男女で育てられ方が違うことも関係しているのかもしれませんが」

そんなおりに新聞広告で、女子大の通信教育課程に家庭科を学ぶコースがあることを知る。南野先生は男性でも入れないか問い合わせ、理由書と校長の推薦書を用意することで受講を認められた。そして30歳で家庭科の教員免許も取得した。

無気力は心の問題ではなく生活の問題ではないか？

家庭科を学ぶようになると、自分たちの暮らしているのは、食生活や住環境、家族などの人間関係、経済問題などがつながりあつて成り立っており、そのどこかのバランスが崩れると暮らしては乱れ、心や体にも悪影響が及ぶことを知った。

すると生徒たちを見る視点も変わった。英語の授業中に眠る生徒やダルそうにしている生徒は、当初はやる気がないのだと思っていた。けれども話をよく聞くと、頑張りたいの頑張りきれいな生徒も多く、その背景には、食生活の乱れや夜更かしなど、生活の問題が横たわっていることが多々あったのだ。

それを各家庭の問題や「親がしてくれないから」で済ませていいのか。生徒が自力で改善できることもあるのでは？ 家庭科なら、そんな生徒の暮らしに寄り添いながら、一緒に考えたり悩んだりすることが



休み時間に夢の世界へ。生徒が授業中に居眠りをしたときは、南野先生は注意をするが、怒るというよりもまずは生活状況を確認する。

できるのではないかと。英語と家庭科とでは、教員の採用枠が違う。南野先生は採用試験から受け直すことを決断し、35歳のときに家庭科の教師になった。

ちなみに、教壇に立つようになった今も、先生という立場をどこか懐疑的・批判的にみてもう感覚は残っているそっだ。また、自分の今の生活に役立っている明確な意図をもって家庭科を学んだので、教科書の内容は生活の変化とともに古くなり、それだけに頼れるものではない、との実感も深まった。だから南野先生は生徒に次のようなことも伝えている。「僕は今、こうするといよいよ、と言ったけれど、10年経ったら、南野先生にだまされた、と思うことがあるかもしれない。それは十分にありえることだから、そのとき、そのとき、目の前にある情報を参考にして自分で判断しないとあかんぞ」



1年4組の皆さん

先生自身の体験も語ってくれるのが楽しい

「南野先生の授業は、自分でパンを作った話だったり、食中毒になった話だったり、自分の体験も話してくれるからわかりやすいです」

「先生自身が料理や食にこだわっているのも感じます」

「調理実習のときには、清潔にやることにまずく気を配っていると感じています」

「授業では私たちの意見もよく聞いてくれます。毎回、ノートに『私の考え』を書いて提出しないといけないのですが、そこで質問したことにも答えてくれます」

「野球部なのですが、家庭科の授業を受けてから、毎日の食事については、野菜や肉やご飯などをバランスよくとっていきたいと思うようになりました」

生徒はこう変わる

生徒が自分で考えて、今動くことが自信につながる

「か、今、考えてほしいんですよ。今それをせずに、将来、突然できるようなものにはありませんから。これはあかんと思うことがあれば、どこかで立て直すことが必要で、先延ばしせずに今できることからやってみてほしいのです」

南野先生は、授業ごとに生徒に「私の考え」を書いてもらうほか、定期テストでは自由記述欄を設け、今回の試験範囲で勉強してよかったと思うことを書いてもらっている。そのなかで生徒が「お店で食品表示を見て買うようになった」「家族にも一定の距離感が必要だと思った」などと、自分の行動が変わったことや、新たな発見があったことを伝えてくれたときに、一番のうれしさを感じる。

だから南野先生は、「生徒がやるうと思えば自分でできること」の発信にも力を入れる。発酵食品を授業で取り上げたなら、自作のプリントに、甘酒やヨーグルト、納豆などの作り方を載せ、「興味があつたら作ってみて」と呼びかけるように。夏休みには「家族のために食事を作る（家族に食べてもらうのが難しい場合は、食べてもらう人を一緒に考える）」という宿題も出す。そうした経験のなかで生徒が「自分ができること」や「誰かにしてあげられること」があると感じると、生きていくことへの自信も深まるからだ。

難しいことは承知で、南野先生は新入生に「高校生は自分の弁当を自分で作ってもいいと思う。3年間やり通せたら自信になるよ」とも伝えてきた。それに挑戦してくれた女子生徒もいて、卒業式の際、彼女は涙ぐみながら、笑顔で報告してくれた。最初は大変だったこと。何度もやめようと思ったこと。でも、

「今は続けてよかったと思う。先生が言っていたとおり、自信になった」

南野先生にとっても印象深い出来事だ。ただ、一方で南野先生は「家庭科の授業によつて生徒が必ずこう変わる、と言えることはないのかなあ、と思います」と慎重な見方もしている。教師ができるのは、あくまでも生徒が動き出す「きっかけ」になるものを届けることで、生徒に何らかの行動を強制したのでは意味がない、と思っているからだ。

「今の生徒たちはふりまわされているように思っています。親が言ったからとか、先生が言ったからとか、誰かの言うことを聞くとする。だけど自分自身はあまり納得できてないから、やらされている感があつてつまらない。そうではなく、己のためや誰かのために『こうしたい』という意思をもつて、自分から動いてほしい。そのほうが、しんどいことはあつてもやり遂げたときの喜びもあつて、生きることが楽しくなると思うんですよ。自分の人生を、自分らしく楽しんでほしいです」



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	<p>教科書の内容+生活関連トピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭や地域で暮らすうえで必要な「衣食住」「消費生活」「保育」「福祉」「高齢者」「家族」「ライフデザイン」などに関する基礎知識。 基礎知識を踏まえて、生徒が今の生活に結び付けて考えられるトピック。「甘酒は病院の点滴の成分に近く夏バテに有効」「発酵していない糠漬けなど偽者もお店で売られている」など。 	<p>生活的自立</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で自分の暮らしを整える力。 <p>精神的自立</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で責任をもって判断する力。 <p>経済的自立</p> <ul style="list-style-type: none"> 収入に合わせるなど見通しをもって暮らす力。 <p>性的自立</p> <ul style="list-style-type: none"> 性を豊かな関係性を築くために使う力。 	<p>自分の生き方を自分で考える姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業で「私の考え」を書くことなどを通して、生徒が生活の知識・技術をただ覚えるのではなく、その習ったことから何を感じてどうしたいと思ったか、自分で考えられるようにする。 <p>お互いさまの感覚</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活面の個人の考え方や環境の違いを知ったうえで、お互いに支え合おうとする感覚を育む。
その力が将来にどう生きるか?	<p>今この時点から生活を改善できる</p> <ul style="list-style-type: none"> 将来というよりも今この時点から、衣食住などで自分が何を大事にしたいかを具体的に考えられるようになり、生活を改善していける。 <p>生き方を選ぶときの判断材料になる</p> <ul style="list-style-type: none"> この先、衣食住から消費、経済活動まで、生活のバランスをどう取るのか、自分は何を優先するのかを考えるときの判断材料になる。 	<p>生活や仕事で人に依存せず自立できる</p> <ul style="list-style-type: none"> 暮らしや仕事で、物理的または精神的に誰かに依存すると、その相手の気分や状況に常に振りまわされてしまう。そうではなく、自分の意思でやることを選び、人生を組み立てていける。 <p>心や体の健康を保ちやすくなる</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活リズムを自分で整えられるようになり、生活が乱れて心や体も痛めてしまうことが減る。 	<p>人生を楽しめるようになる</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活のなかでよくわからないことを言われたままやるのではなく、自分がしたいと思ったことをやり、できたときの喜びも味わっていける。 <p>他人と助け合える関係を作れる</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分でできることは自分でやり、できないことは助けを求め、手助けがいる人には相手を尊重しながら力を貸す、という関係を構築できる。